

第 52 回日本国際経済学会関西支部総会報告 2010 年 6 月 12 日午後 2 時～、於：和歌山大学 4F 小ホール

韓国併合 100 周年—韓国併合と内鮮一体化論

本山美彦（大阪産業大学）

はじめに

日本には、日清、日露戦争に踏み切る以外の選択肢がなかったのかを、真摯に自省してみることが、韓国⁽¹⁾ 併合 100 周年の 2010 年には、とりわけ必要なことである。「あの時代はよかった」ではなく、「あの時代、東アジアを日本が地獄に叩き込んだ。どうすれば贖罪ができるのか」という自省が今の日本には求められているのに、「坂の上の雲」賞賛のオンパレードとは、何たることか。

遠くから日本を眺めていたネルーの次の言葉が、当時のアジア人の偽らざる心境を伝えている。

「（日清戦争の日本の勝利によって）朝鮮の独立は宣言されたが、これは日本の支配をごまかすヴェールにすぎなかった」（ネルー[1996]、170 ページ）。

「日本のロシアにたいする勝利がどれほどアジアの諸国民をよろこばせ、こおどりさせたかを、われわれはみた。ところが、その直後の成果は、少数の侵略的帝国主義諸国のグループに、もう 1 国をつけくわえたというにすぎなかった。そのにがい結果を、まず最初になめたのは、朝鮮であった。日本の勃興は、朝鮮の没落を意味した」（同、181 ページ）。

当時の日本にも、朝鮮にも、足を踏み入れたことのないネルーですら、このように事態を正しく見抜いていた。ネルーの透徹した眼とは対照的に、今の日本の保守的イデオロギーの持ち主たちは、朝鮮人民に与えた塗炭の苦しみへの贖罪の気持ちを一片も持ち合わせていない。持ち合わせていないどころか、罪は、清国とロシアに挟まれた朝鮮の地理的空間にあるとまで言い切る司馬の小説が、多くの保守的イデオロギーの持ち主たちの心を描いている。朝鮮を他の強国に取られてしまえば、日本は自国を防衛するのが困難になっていたとの主張を展開した『坂の上の雲』関連の書籍が書店で平積みされている。

1 清を嵌めた陸奥宗光

陸奥宗光（むつ・むねみつ）の『蹇蹇録』（けんけんろく）の表題は、「心身を勞し、全力を尽して君主に仕える」という意味の『易経』にある「蹇蹇匪躬」（けんけんひきゆう）から採られたものであることと、『蹇蹇録』には、次の文言があることを付言しておく。

「この際如何にしても日清の間に一衝突を促すの得策たるべきを感じたるが故に、(1894 年) 7 月 12 日、大鳥公使に向かい北京における英国の仲裁は已に失敗したり、今は断然たる処置を施すの必要あり、いやしくも外国より甚だしき非難を招かざる限り何らの口実を

用ゆるも差支えなし、速やかに実際の運動を始むべしと電訓せり」（陸奥[1983]、73 ページ）。

事実関係を説明しておこう。1875 年、明治政府は江華島（Kanghwa-do）に艦砲射撃を行った。江華島事件である。実は、江華島に対しては、日本よりも米国が先に攻撃していた。米国は、1871 年に同島に艦砲攻撃を行っていたのである。理由は不明だが、この時に、日本は長崎港を米国側に艦隊の出撃基地として使わせた。米国艦隊は朝鮮の防衛線を破ることができずに撤退したのであるが、その 4 年後、日本が同島を攻撃している。その際、米国側から同島周辺の海図の提供を受けた。明治政府は、国交がなかった国に何の予告もなく近づき、朝鮮側から砲撃されたので応戦したと説明してきたが、それは挑発以外の何ものでもなかった。この事件のあった翌年の 1876 年、日朝修好条規が結ばれた。それは、朝鮮を開国させる不平等条約であった。この条約は、当時の欧米が日本に押しつけていた条約よりも、はるかに朝鮮側に対して不平等なものであった。日本と欧米との不平等条約は、関税自主権がなかったが、それでも、日本側は関税を外国からの輸入品にかけることができていた。しかし、日朝不平等条約は、関税そのものにかけること自体を、朝鮮に許さなかったのである（高井[2009]、7～8 ページ）。

それに反発した朝鮮軍は、1882 年（壬午）に反日のクーデターを起こした。「壬午（Im-O）事変」である。これは、朝鮮の兵士と市民が、日本の公使館を襲撃した事件である。日本の業者が朝鮮米を買い占めて日本に輸出していたために米価が暴騰したことから、日本人への怒りが爆発したものとされている。日本は、軍隊を派遣して乱を鎮圧し、その後、引き揚げたが、清は、守旧派と言われる閔氏（Minshi）政権の要請に応じて、国内の治安を維持すべく朝鮮に軍を駐在させた。

当時、清と朝鮮との関係は、朝貢体制であった。朝貢体制というのは、中国の皇帝を頂点とし、他国は、中国に頭を下げる宗属国という地位に甘んじるという関係を指す。しかし、こうした上下関係はあくまでも建て前であって、実際には、他国は独立を保ち、清からの指令を受けていなかった。しかし、壬午事変が、事情を一変させた。清は朝鮮の政治に介入するようになったのである。

これに反発したのが金玉均（Gim Ok Gyun）などのいわゆる開化派であった。彼らは欧米列強の力を借りて朝鮮を近代化させようとしていた一派であった。

この動きに日本が乗った。日本は軍を派遣して、開化派のクーデターを支持し、閔氏政権を打倒しようとした。これが、1884 年の「甲申（Gap-Shin）政変」である。日本軍は、朝鮮王宮の景福宮（Gyeongbokgung）を警備したが、清の袁世凱（Yuan Shikai）軍の介入によって、日本軍は撤退し、クーデターは失敗した。1885 年、日清間で天津（Tianjin）条約が締結され、日清双方とも軍事顧問の派遣中止、軍隊駐留の禁止、しかし、止むを得ず朝鮮に派兵する場合の事前通告義務、などが取り決められた（高井[2009]、9 ページ）。

1894 年（甲午）2 月、「甲午（Gap-O）農民戦争」が発生した。民衆に根づいた新しい考

え方（東学）に傾斜していた農民反乱であった。東学（Tonghak）とは、天を尊敬し、自らの心の中に天が存在するという朝鮮の古来からの思想を奉じる考え方であり、この思想に共鳴した民衆は、西欧と日本を排斥する運動に参加するようになって行った。

農民軍は、1894年5月31日、全羅道（Jeolla-do）全域を占領した。追いつめられた朝鮮政府は、清に応援を依頼した。これに対して、明治政府は、「公使館と日本人居留民保護」を口実に出兵し、首都・漢城（Hanson、現在のソウル）を占領した（高井[2009]、14ページ）。

陸奥の日記にある1894年7月12日の指示は、この甲午農民戦争と関連したものである。明治政府は、天津条約を盾に、止むを得ない状況が起こったとして出兵したのである。日本軍の出兵は1894年6月2日に閣議決定された。反乱軍は、日清両国の介入におののき、朝鮮政府と和解した。つまり、日本は軍を朝鮮に駐留させる口実がなくなった。

朝鮮政府は、日清両軍の撤兵を要請したものの、両軍とも受け入れなかった。1894年6月15日、伊藤博文（ひろぶみ）内閣は、朝鮮の内政改革を日清共同で進める方針であるが、それを清が拒否すれば日本単独で指導するというシナリオを閣議で合意させた。6月21日、清が日本の提案を拒否すると、伊藤内閣と参謀本部・海軍令部の合同会議で、いったん、中止していた日本軍の残部の輸送再開を決定した。英国が調停案を提示したが、7月11日、伊藤内閣は、清との国交断絶を表明した。日清開戦の危機が一気に高まった。7月16日、日英通商航海条約が調印され、英国が日本の側に立つことになった（ただし、この条約が公表されたのは、1894年8月27日）。

このように緊迫した時期に外相の陸奥による上記の指示が出されたのである。それは、開戦の口実を探せという、とんでもない命令であった。陸奥の指示を受けた大鳥圭介（おとり・けいすけ）公使は即座に行動した。7月20日、大鳥公使は、朝鮮政府に対し、朝鮮の「自主独立を侵害」する清軍の撤退と清朝間の「宗主・藩属関係」の解消について、3日以内に回答するように申し入れた。7月22日夜、朝鮮政府は、「改革は自主的に行う」、「乱が治まったので日清両軍には撤兵してもらおう」という当然の内容の回答を大鳥公使に渡した。

ただちに日本軍は行動を起こした。7月23日午前2時、日本軍の2個大隊が漢城の電信線を切断し、朝鮮王宮の景福宮を占領した。そして、政府内の閔氏1族を追放した上で、閔氏によって追放させられていた興宣大院君（Heungseon Daewongun）を担ぎ出して新政権を樹立した。朝鮮の新政権から日本に清軍撃退を要請させるためであった。日清両軍が朝鮮内で衝突があった後、8月1日、日清両国は宣戦布告をした（藤村[1973]、参照）。

口実を設けて、清を叩く戦争を狙い通り起こすことに陸奥は成功した。

日清戦争によって、朝鮮から清の勢力を排除した日本であったが、朝鮮の単独支配には成功しなかった。閔氏一族がロシアの支援を受けて朝鮮で復権してきたからである。それを阻止すべく、王妃の閔妃（Minpi）虐殺事件が起こり（1895年10月）、親日政権ができ

た。親露、親日派による血みどろの内紛の後、1897年に、それまでの国王・高宗（Kojong）を皇帝とする新政権が成立し、大韓帝国という国号になった。そして、新政権は、1900年、ロシア人顧問を退去させ、日本に対して新生韓国の中立維持の交渉を開始した。ロシアも1901年に韓国の中立を保証する協議を日本に提起したが、日本はロシアの申し込みを拒否した。新たに国号を改称した韓国の単独支配を日本は狙っていたからであるのは言うまでもない。

1902年に日英同盟（Anglo-Japanese Alliance）が成立する。英国からの全面的支援を受けることになった日本は、その翌年の1903年、強硬姿勢で日露交渉に向かうことになった。韓国における日本の権益確保については、一切、ロシアに文句を言わず、満州においては多少、ロシアに譲歩するというシナリオであった。交渉が決裂すれば、対露開戦に踏み切ることも視野に入れた交渉だったのである。事実、1904年2月、日本は交渉を一方向的に打ち切り、ロシアに宣戦布告をした（1904年2月6日）。

対露戦争に踏み切る一方で、日本は韓国に軍を進めた。日露戦争に対して、ただちに局外中立を宣言した韓国に圧力をかけるべく、1904年2月23日に「日韓議定書」を締結した。さらに、8月、「第1次日韓協約」を強要して韓国内政・外交のほとんどを、日本が掌握することになった。日露戦争を遂行する最中に日本は着々と韓国の植民地化を進めていたのである。政治に介入しただけではない。抗日闘争の強かった地区に対して、日本は、軍事的占領を行った。それだけではない。日露戦争を遂行すべく、韓国の各地で労役・物資の調達、土地の収容なども行ったのである。

日露戦争後のポーツマス講和条約（1905年9月）によって、日本は、ロシアに、日本による韓国の単独支配を認めさせた。そして、1905年11月17日、「第2次日韓協約」によって、韓国を完全に保護国化してしまった。保護国とは、国際法上、国家主権を無くした国のことである。ただし、保護国にしてしまうには、韓国と公使などを交換し合って外交関係を持つ諸国の同意を得る必要がある。日本は、米国のフィリピン領有、英国のインド領有を認める代わりに、韓国の保護国化を英米に認めさせたのである（高井[2009]、12ページ）。

「第2次日韓協約」は、軍事的威嚇下で強要されたもので、無効であると皇帝の高宗が諸外国に働きかけていたことを理由に、1907年高宗の廃帝、軍隊の解散を日本は強行した。当然、韓国人による抗日闘争は激化した。1907年から韓国併合が行われる1910年までのわずか3年間で、韓国人の義兵と日本軍との抗戦回数は、2800回を超えたという（高井[2009]、13ページ）。

2 時代と闘った日本基督教会牧師・鈴木高志

保守主義的イデオロギーは、古今東西を問わず、悠久の古代の神話によって民族的アイ

デンティティーを鼓舞するものである。明治政府は、古代の神武天皇神話に復古しようとするイデオロギーを国体とした。それは、朝鮮を領有したいとの欲望が生み出したものであった。

その欲望は、紙幣にも表現されている。明治政府は、1883年に紙幣を発行した。人物像が印刷された紙幣としては、日本で最初のものであった。その人物とは、神話の神功（じんぐう）皇后であった。この人は、仲哀（ちゅうあい）天皇の皇后で、応神（おうじん）天皇の母である。『日本書紀』では気長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）、『古事記』では息長帯比売命（おきながたらしひめのみこと）・大帯比売命（おおたらしひめのみこと）と記されている。神功皇后は、神のお告げによって、新羅（Silla）、高句麗（Goguryeo）、百濟（Baekje）を征服したという三韓征伐を果たした神話上の女性英雄である。ちなみに、私が住む、御影石で名高い御影（みかげ）という地区名は、神功皇后が、三韓征伐の帰途、立ち寄った泉（沢の井）に自分の姿を写して化粧をした、つまり、み影を映された場所という神話から採られた地名である。

国家権力の象徴に朝鮮征伐の神話を表象化した点に、明治政府による朝鮮領有意思が見て取れる（中塚「2009」、192ページ）。

日本基督教会に属する全羅北道（Jeollabuk-do）群山（Gunsan）教会に鈴木高志という牧師がいた。1919年3月1日の朝鮮における3・1独立運動直後の5月、彼は、日本基督教会機関誌『福音新報』（1919年5月8・15日）に以下のような日本人批判を寄稿している。それは、今日の私たちにも感動を与える文である。

鈴木論文は、長い格調高い旧文体ではあるが、現代的には読みにくいので、平たく要約させていただく。タイトルは「朝鮮の事変（独立運動）について」である（〈 〉内に要約）。

＜暴動は鎮圧できるであろう。しかし、鎮圧できないのが、朝鮮人の精神、つまり、彼らの排日思想である。排日思想という彼らの感情は根深い。

そうした感情が生まれたのには、いろいろな要因がある。遠因としては、朝鮮人の対日軽蔑、倭寇への憎悪、豊臣秀吉への怒りがある。近因としては、併合への反感、日本の独善的（主我的）帝国主義への反発、政治的不満、経済的不安、社会的差別への反感、日本人の道徳のなさへの反感、などが考えられる。

しかし、最も大きな要因は日本の主我的帝国主義への反発である。根本には日本の国是に対する反発がある。これは、朝鮮だけの反発ではない。中国、米国、豪州でも同じである。世界に存在している排日思想は、日本の主我的帝国主義が生み出したものである。それは日本の帝国主義が生み出している影である。影を憎む前に、先づ自身を省みる必要がある。「国威を海外に輝かす」、「大いに版図を弘める」、「世界を統一する」とかが日本の理想とされ、それを主義として進んできた結果が、隣近所をすべて排日にしてしまつて、日本の八方塞がり招いている。

朝鮮人も人間である。国民的自負心もあり国家的愛着心もある。ところが、日本人は、愛国心を日本人のみの専売特許のように思い込んでいる。「日本主義」を謳って、日本人は、傍若無人に振る舞ってきた。そうするかぎり、日本に対する彼らの反感は止むはずはない。私たちは、このような日本主義的精神から脱（擺脫、ひだつ）して、「自分を愛するように隣人を愛する」という愛の道徳に立たねば、東洋での位置を確保できなくなるであろう。ところが、日本の学校では、倭寇、征韓の役の武勇伝が、年少者たちの血を沸かす題目になっている。朝鮮では、この題目が排日思想の種子蒔となっているのである。当然である。倭寇は、沿岸のいたるところで家を焼き、物を奪った。虎よりも恐いものは日本人であった。征韓の役にいたっては、全国焦土となり、朝鮮はこの役以来、疲弊して復興することができなくなったのである。朝鮮人としては日本を恨まざるを得ないのである。

にも拘わらず、日本の国民教育方針は 10 年経っても、20 年経っても、依然としてこの主我的帝国主義の外に出ない。日本の教育における修身、歴史読本、唱歌のいずれの教科科目も、旧式日本の愛国心を鼓舞（涵養）するだけである。日本の愛国心は、自国本位、無省察、唯物的である。日本だけを知って、他国のことを考えないものである。その結果、海外に住むのに非常に不向きな日本人を造り出してしまった。朝鮮に来ている日本人は、婦女子にいたるまで威張ることのみを知って、愛することを知らない。取り立てることを知って、与えることを知らない。「われわれは日本人なり」とふんぞり返り、下に立つ道徳を知らない。それどころか、「上に立つ者は権力を握る」という意識で朝鮮人を圧倒し、蹂躪する。それが日本魂であるかのように心得ている。

朝鮮人は、買物に行っても、役所に行っても、つまり、どこに行っても、日本人に敬愛されることがない。いつも、日本人によって蹂躪され、馬鹿にされ、虐げられているという感覚のみを味わう。併合への反感、総督政治に対する不満もある。日本人が資本の威力を発揮して、広大な土地を買い占め、利益を貪るのを見て、経済的不安の念に駆られ、日本人駆逐すべしと言う朝鮮人もいる。すべての朝鮮人は、社会的に悪く待遇されていることから日本人に反感を抱いている。だからこそ、今回の独立運動は、燎原の火の勢いで各地に波及したのである。その根本原因は帝国主義の中毒にある。今日の学校、今日の軍隊の教育方針では、水原事件（Suwon）のようなことが生じるのは必然である。いくら総督府で善政を布こうとしても駄目である。日本人の素質が変わらねばならないのである。

例外はあるが、在鮮日本人の道徳には遺憾なる点が少なくない。大多数の日本人は、神を畏れず、恥を知らず、金儲け以上の高尚な理想を持っていない。鮮人の無知と貧乏とを奇貨とした悪辣な輩が多い。実業者の道徳の低さは内地でも困った問題であるが、そうした道徳の低い連中が日本の代表者である。たまったものではない。米国人などに日本が見くびられる 1 つの原因は彼らの不道徳である。日本の商人は量をごまかし、衡（はかり）をごまかしている。日本人が入って来たために、朝鮮人の道徳は甚だ悪くなった。この頃

は鮮人もまた量や衡をごまかすようになった。

男女間の道德面での同胞の淫逸放蕩な様は慨嘆に耐え難い。公私宴会の醜態には驚くべきものがある。それを植民地の特権のように心得ている。私はある光景を見た。汽車に乗っていた時、某駅で、ドヤドヤと後から来たものがある。見れば、其地方の1部長（道長官の補佐役、内地でいう内務部長）と警務部長とが、あるべきことか、各々、左右から数名の酌婦に抱きかかへられて、佩剣（はいけん）を引ずり、酔歩漫跚（すいほまんさん）して、ようやく乗車した、否、させられた。しかも、発車するまで、白昼に、酌婦たちと戯れていた。見送りのために、郡守や憲兵隊長をはじめ、幾名かの役人が見ていた。多くの乗降客群が見ていた。その大多数は、白衣の鮮人であった。私は、実に恥かしかった。官吏にして然り。その他は推して知るべしである。

こういう為体（ていたらく）でどうして朝鮮人の尊敬を得ることができるのだろうか。私たちは、朝鮮人が親日になってくれることを願う。しかし、親しむということは、相手に対する愛か敬があって、初めてできるものである。愛は、ただ、愛によって起こる。しかし、日本人は前述の通り、愛ということを知らない。どうして彼らに、私たちに対する愛が起こり得ようか。敬についてはどうか。日本人の今日の道德をもってして、どのようにして、彼らの敬を要求することができようか。朝鮮問題を考えれば考えるほど、問題は精神的なものに移る。日本の国家的理想において、教育の方針において、国民個々の品性と道德において、いずれも、根本的な革新が必要であることは明白である。日本は、どうしても、いま、生れ変らなければならないのである>（『福音新報』第1246号、小川・池編[1984]、456～61ページ）。

彼の日本人批判を読むと、私たち日本人が90年経っても近隣の人々に対する姿勢においてほとんど進歩していないことを思い知らされる。

3 倭館の歴史と日清戦争から始まった日本の海外神社の政治化

日本人の海外展開とともに、いわゆる海外神社が各地の日本人居住区に建立された。海外神社という名称は、菅浩二（すが・こうじ）によれば、神職で神社研究者・小笠原省三によって初めて使われたものであるという（菅[2004]、1、51ページ）。海外に日本の宗教の一翼を担う神社が造営されたということ事態はめくじらを立ててあげつらうようなものではない。日本人の土着信仰の代表であった古来からの神話上の神を祀るという行為は、どの国の人たちにも見られる自然な郷土意識の発露だからである。それでも、日本の敗戦時に海外神社の多くが現地の人たちによって焼き討ちにあったことに衝撃を受けた上記の小笠原省三は、日本の海外神社が初発から日本の侵略の先兵であったとの贖罪の気持ちを率直に吐露している（小笠原[1953]、3ページ）。ちなみに、この小笠原は、後述する朝鮮神宮の造営に対して、神功皇后を祭神とするという日本政府の方針に強く反対し、朝鮮

には朝鮮の土着の神を祀るべきだと主張した神官であった（菅、同書、52 ページ）。

日清戦争以前には、海外神社は、両大戦間期に本格化するような露骨な「国家神道」を指向するものではなかった。むしろ、大陸侵略を想起させる怖れのある神社建設には現地の日本人は臆病であった。ほとんどの海外神社は、現地に居留する日本人によって自前で造営されていたのであるが、祀る対象は平和的・航路の平安を願う神々であった。けっして、「日本の精神」を鼓舞する類のものではなかったのである。

例えば、対馬藩が造営した金比羅神社などがその典型である。対馬藩は、韓国との交易の窓口として、釜山（Busan）に倭館（Waegwan）を置いていた。1679 年には、釜山の龍頭山（Yondosan）に金比羅神社を造営している。祭神の金比羅大神は、航海の安全を守る守護神であった。1945 年の日本の敗戦で神社は破壊されたが、この金比羅神社は、少なくとも、対馬の宗氏（そうし）による交易の安全祈願のために建てられたもので、何らかの政治的意図が込められたものではなかった。それ以外の神、例えば武力を象徴する八幡信仰の神である応神天皇も、江戸時代にあっては、祭神として東アジアの地に祀られることはなかった。金比羅さんの他は、大物主（おおものぬし＝大国主）なども祀られたが、この神も非政治的なものであった。

倭館について説明しておきたい。純粹に交易の窓口であったはずの倭館は、明治政府による対韓国強硬政策の犠牲になった事例を示すものだからである（田代[2002]と村井[1993]に依存した）。

倭館は、李氏朝鮮（朝鮮王朝）時代に朝鮮半島南部に設定されていた日本人居留地のことである。豊臣秀吉による朝鮮侵略（文禄・慶長の役、韓国では壬辰倭乱（Imjinwaeran）・丁酉再乱（Jeongyujaeran）と呼称）以前には複数存在していたが、江戸時代には釜山に限定され、日本側は対馬藩が管理していた。

朝鮮半島は、中世以降、海賊の倭寇にずっと苦しめられてきた。1392 年に成立した李氏（Isi）の朝鮮王朝（Choson Wangjo）も、日本船の入港地と日本人居住地区を、当時の富山浦（Busanpo、現在の釜山広域市・Busan-Gwangyeoksi）、同じく当時の乃而浦（Neipo、現在の慶尚南道鎮海市・Gyeongsangnamdo Jinhaesi）、そして、当時の塩浦（Yonpo、現在の蔚山広域市・Ulsan-Gwangyeoksi）という 3 つの港地区（三浦＝Sampo）に制限しようとしていたが、これも、1510 年、居留日本人の暴動（三浦の乱＝さんぽのらん）などによって、日本人を押さえ込むことに失敗し続けた。反乱の中心勢力は、倭寇の拠点であり、朝鮮との交易に利益を持つ対馬の宗氏であったと言われている。

在留日本人は、朝鮮王朝に税も払わず、田畑を耕作し、一種の治外法権的な勢力を持っていた。これを取り締まろうとした朝鮮王朝に対して、対馬からの援軍によって日本人が暴動を起こしたのが、三浦の乱であった。表面的には三浦の乱は、朝鮮王朝によって鎮圧されたことになっているが、実際には、朝鮮に居住する日本人は対馬の支配者宗氏の統治に従うことになっただけのことである。つまり、三浦の乱以前には、九州・中国地方の諸

勢力も朝鮮王朝から許可を受けて比較的自由に朝鮮と通交していたが、三浦の乱を境に通交権は宗氏に集中し、宗氏が日朝貿易を独占してしまったのである。そして、日朝交易から締め出された勢力の一部が明の海商と結びついて、倭寇として朝鮮半島でますます略奪を繰り返すようになった。建て前的には、1588年に豊臣秀吉が海賊停止令を定めて倭寇は消滅したとされているが、それは刀狩りの一環であって、秀吉は、民間の武装勢力を一掃することを狙っただけのことであつたし、対馬の宗氏を配下に置いた上で、朝鮮出兵の準備をしたのである。

1592～1598年という7年間に及んだ秀吉による文禄・慶長の役によって、朝鮮は荒廃してしまつた。朝鮮王朝は日本と断絶したが短期間しか断絶状態は続かなかつた。対馬藩が、執拗に要請して、1607年に対馬藩を窓口とした日朝交易を再開させたのである。この時に、対馬藩は、釜山に豆毛浦倭館（Dumopo Waegwan）を新設している。さらに、対馬藩は、江戸幕府から朝鮮外交担当を命じられ、新設された倭館における朝鮮交易の独占権を付与された（http://english.historyfoundation.or.kr/?sub_num=119）。

その後、この建物が手狭になつたので、1678年に移転・拡張して草梁倭館（Choryang Waegwan）になつた。この草梁倭館は、現在の龍頭山公園一帯にあつて、10万坪もの面積があつた。同時代の長崎の出島は約4000坪であつたから、その25倍に相当する広大なものであつた。敷地には館主屋、開市大庁（交易場）、裁判庁、浜番所、弁天神社のような神社や東向寺、日本人（対馬人）の住居があつた

（<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%80%AD%E9%A4%A8>）。

海外神社に話を戻そう。

明治時代に入って、日本人の韓国進出が活発になると、対馬藩が造営した上記の金比羅神社は、1894年に「居留地神社」と改称され、さらに、1899年に大造営されて「龍頭神社」になつた。

この時に、祭神として、神功皇后が追加されたのである。それだけではない、同時に朝鮮人にとって、最も忌まわしい侵略者である豊臣秀吉までもが「豊国大神」として祀られることになつた（龍頭神社社務所[1936]、36～41ページ、及び、菅[2004]、170～71ページ）。ちなみに、1901年には官幣大社の台湾神社が建設されている。神社組織は、キリスト教に対抗して、明確に清・韓の民衆を懐柔するために、伊勢神宮を頂点と仰ぐ海外神社建設の促進を決議した（佐伯[1905]、1～6ページ）。

1906年には、韓国に神社を建設して「国民的教化」を行うべきことが、福本日南（ふくもと・にちなん）などによって、関西（くわんせい）連合会第1回大会で決議された（菅[2004]、56ページ）。ちなみに、福本は、陸羯南（くが・かつなん）と共に1989年に新聞『日本』を総監し、「忠臣蔵」ブームを起こした人である。

しかし、そうした動きに対して反対する神職もいた（< >に要約）。

< 韓国人は礼儀をわきまえた人たちである。この人たちに、「我が天祖の神宮を礼拝せ

よと命」じめることは、韓国民の嫌悪を招くだけであり、「我が外交政策を誤解」させる媒介になるおそれがある> (菅、同上書、56 ページ、及び、木田[1906]、45～49 ページ)。

そうした少数の反対意見もあったが、明治政府は、日本の神道導入を進めるために、併合と同時に、儒教に基づいて古来から韓国で存続していた、「仲春」、「仲秋」、「祈穀」、「祈雨」などの祭祀を禁じた。それらは、「正しく我が国体と相容れざるもの」だという総督府の判断から出された措置であった(徳富[1929]、297～99 ページ)。1911年の春期祭からすべての伝統的祭祀は公の場では禁じられた。そして、1911年度末の日本の政府予算案に朝鮮神宮造営関係のものが登場することになったのである。

日本政府は、この頃から韓国におけるキリスト教を強く意識するようになっていた。現在の韓国のクリスチャンは、カトリック、プロテスタントを合わせて人口の3分の1を占める。これは日本の1%に比べて非常に大きな数値である。韓国ではナショナリズムとキリスト教とが強い結びつきを持っていたことに特徴がある(Grayson[1993], p. 13)。

この点について、初期の日本の為政者たちは熟知していたので、キリスト教との共存を図っていた。1905年、日本は韓国の外交権を事実上奪い、統監府を設置したが、初代統監の伊藤博文は、メソジスト(Methodist)の宣教師に対して、朝鮮人の精神生活を豊かにするように依頼するという宣教師懐柔を試みた。宣教師の本国への影響力を重視していたのである(朝鮮総督府[1921]、6 ページ)。懐柔策は一定の効を奏して、韓国は他の列強に支配されるよりは日本に支配された方がよいという宣教師まで出ていたという(姜渭祚[1976]、34 ページ)。

周知のように、半島は、長い間、朱熹(Chu Hsi、朱子は尊称、1130～1200年)によって創設された朱子学が社会の支配層の必須の教養となっていた。民衆宗教として仏教があったものの、社会への影響力は微々たるものであった。ローマン・カトリックは18世紀末に半島に伝来したが、朱子学の祖先祭礼への参加を拒否したために迫害され続けていた。しかし、1392年に成立した李朝支配下で繁栄していた朱子学も、1910年の韓国併合時までには急速に衰えを見せていた。

韓国の社会的・経済的疲弊によって、多くの韓国民衆は新しい精神的拠り所を求めていた。それに呼応できたのがキリスト教、とくに、プロテスタントであった。彼らの成功は、新訳聖書の出版を漢字でなくハングルで行ったことによる⁽²⁾。1910年の韓国併合までには、ミッション系スクールが小学校から大学まで出揃い、韓国のキリスト教的啓蒙思想が急速に普及した。悲惨な状態に民衆が喘ぐ時、哲学的な朱子学の「太極」(the Great Ultimate)という観念よりも、人間の姿をしたイエスの表象の方が民衆の心を掴めたのだろうとグレイソンは推測している(Grayson[1993], p. 15)⁽³⁾。

伊藤博文が暗殺された後になると、日本政府と朝鮮総督府は、それまでとは一転して、キリスト教を敵視するようになった。韓国のキリスト教は、韓国併合に反抗する強力な組織と決めつけられた。例えば、朝鮮総督府は、1865年、アーサー・サリバン卿(Sir Arthur

Sullivan)によって作曲されたという賛美歌、「進めキリストの兵士たちよ」(Onward Christian Soldiers)やプロテスタントの国際的な福音伝道組織である「救世軍」(Salvation Army)などに、露骨な警戒感を示していた(Clark[1971], p. 187)。この救世軍というのは、メソジスト教会牧師、ウィリアム・ブース(William Booth)が1865年に設立した「東ロンドン伝道会」(East London Christian Mission)が始まりで、1878年に改称したものである。

明治政府が、「韓国併合に関する件」を閣議決定したのが、1909年7月6日であった。

「韓国を併合し之を帝国版図の一部となすは我が実力を確立するための最確實なる方法たり。帝国が内外の形成に照らし適當の時期において断然併合を實行し半島を名実共に我が統治の下に置き諸外国との条約關係を消滅せしむるは帝国百年の長計なりとす」(吉岡[2009]、67ページより引用)。

これは、日本が、韓国併合でアジアの列強として欧米に認知させ、当時の不平等条約改正を100年の計として狙っていたことが率直に吐露された決議である。

1909年7月6日の閣議決定を受けて、各国との調整を始めた明治政府は、10月伊藤博文をロシアとの交渉に当たらせた。しかし、1907年7月24日、日本軍の武力で威嚇的に調印させられた「第3次日韓協約」で軍隊を解散させられた韓国では、両班(Yangban)層とクリスチャンたちが義兵(Uibyeong)闘争を本格的に展開することになった。

その典型が、両班出身で、カトリック信者であった安重根(An Jung Geun、1879~1910年)である。彼のクリスチャン・ネームはトマス・アン(Thomas An)であった。東学(Tonghak)に反対していた安は追われてカトリックに属するパリ外国宣教会(Société des Missions Etrangères)のジョゼフ・ウィレム(Nicolas Joseph Marie Wilhelm)司祭に匿われて洗礼を受けた。そして、安は、1907年大韓帝国最後の皇帝・高宗の強制退位と軍隊解散に憤激し、ウラジオストクへ亡命、抗日闘争に身を投じる。そして、1909年10月26日、ハルビン(哈爾濱、Harbin)駅構内において、ロシア蔵相のウラジーミル・ココフツォフ(Vladimir Nikolayevich Kokovtsov)と会談するために現地に赴いていた伊藤博文(暗殺当時枢密院議長)に対し安重根は群衆を装って近づき拳銃を発砲、大韓帝国の国旗を振り韓国独立を叫んだ。留置中に伊藤の死亡を知った際、安重根は暗殺成功を神に感謝して十字を切り「私は敢えて重大な犯罪を犯すことにしました。私は自分の人生をわが祖国に捧げました。これは気高き愛国者としての行動です」と述べた。また、彼は、留置場での日本から与えられる食事を拒否したという(Keene[2002], pp. 662-67. 邦訳、[二〇〇七]第四分冊、二六九ページ)。

1910年8月22日、日韓両政府の間で「韓国併合に関する条約」の調印があった。条約の第1条には、韓国皇帝による日本皇帝への「統治権の譲与」が明記された。文面は、

「第1条 韓国皇帝陛下ハ韓国全部ニ関スル一切ノ統治権ヲ完全且永久ニ日本国皇帝陛下ニ譲与ス」、「第2条 日本国皇帝陛下ハ前条ニ掲ケタル譲与ヲ受諾シ且全然韓国ヲ日本帝国ニ併合スルコトヲ承諾ス」

という韓国側の尊厳を踏みにじる冷酷なものであった。ここに、李朝 500 年の歴史が事実上閉じた。その 1 か月後、勅令「朝鮮総督府官制」により、朝鮮総督府が設置され、それまでの統監・寺内正毅（てらうち・まさたけ）がそのまま初代朝鮮総督に任命された。

「併合」という用語は、当時、一般的なものではなかった。この用語は、1909 年 3 月に、外務省政務局長・倉地鉄吉が、外相・小村寿太郎の命で作成した「対韓大方針」草案の中で使われていた。対等の合邦でもなく、さりとて、完全隷属させるという雰囲気避けつつ、日本が韓国を支配下に置くという政治的に配慮した用語が「併合」であった（海野 [1995]、209 ページ）。ちなみに、1895 年の台湾割譲は、清朝のお膝元を意味する「直隸」が日本の直轄地に変更されたという意味で「改隸」という用語が使われた。

4 韓国併合を巡る伊藤博文の逡巡

オーストラリア防衛力アカデミー・歴史部門 (Dept. of History Defence Force Academy) のスチュアート・ローン (Stewart Lone) は、朝鮮半島を侵略してきた歴史を持ちながら、その歴史が生み出した韓国人の対日憎悪を解消する努力を日本人はまったく払わず、ただ、韓国の近代化に向かって韓国人を教育するという一人よがりの弊に陥っていたと当時の日本の為政者たちを厳しく批判している。以下、要約する。

韓国の歴史には日本の侵略が散りばめられている。中世には倭寇と呼ばれる海賊が跋扈していた。16 世紀には秀吉の侵略があった。近年では 1876 年の江華条約 (Kanghwa Treaty) につながる砲艦外交があった。韓国人は重視する。仏教も漢字も日本人は韓国から学んだことを。韓国人は日本人の芸術を軽蔑している。その多くが日本に連行された韓国人芸術家が伝えたものだからである。韓国人の心の奥底には日本人へのこのような憎悪がある。しかるに、日本人は、韓国人を教育するという「幼稚な道具」 (primitive tools) で、韓国人を慰撫しようとしている。十分な時間をかけて慎重に韓国人の憎悪を解明しなければならないのに、日本人の視点は「あまりにも定まっていない」 (too uncertain) (Lone [1991], pp. 152-53)。

確かにそうではあったが、少なくとも伊藤に関するかぎり、韓国人の心情を思いやる姿勢はあった。一九〇七年五月、伊藤は、韓国の内閣改造を図り、首相に李完用 (I Wan Yong)、農商大臣に一進会 (Ilchinhoe) の指導者、宋秉峻 (Song Pyon Jun) を就けた⁽⁴⁾。

伊藤から首相を命じられた李完用は、伊藤のこの言葉に答えて次のように挨拶した。

私たちは、日本と協同関係に入ったことを喜んでいますが。国家というものは、人間と同じく、強い力なくして立つことができるものではありません。つまり、力なくして国家の独立を望むのは愚かなことです。力のない韓国にとって、地理的に近く、運命においても密接に結びついている日本との協同関係を持つことが最も有益です。これが、日韓協同をする一つの理由です。いま一つの理由は、中国や他の国に従属しても何の益もないという

点にあります。日本には韓国を併合する力がありますが、そうしなくて、韓国と協同関係を日本が維持してくれれば、韓国は力を蓄えることができるのです。韓国にとって、日本との協同関係こそが自国を守る最上の方策なのです（金[1964]、第6巻の1、484ページ）。

李完用ほどの日本への傾倒ぶりこそ示さなかったものの、日本の力に依存しなければ韓国の自立はできないといった考え方は、クリスチャンである尹致昊(Yun Chi Ho)にもあった（姜[1982]、442ページ）⁽⁵⁾。

1908年当時の伊藤の姿勢は、韓国人を激高させないことを旨とする融和的なものであった。表面的なものであったとしても親日姿勢を示す李完用を重用しながらも、李よりも対日強硬路線の宋秉峻を内閣に入れるという二面作戦を伊藤が採ったのも、一進会¹⁾の先鋭化を防ぎ、激化する韓国の反日闘争を鎮静化させようとしていたからである。当然、伊藤は、日本の対韓強硬派から激しく攻撃されていた。ところが、伊藤が頼みとする李と宋との間は陰悪であった。伊藤は、両者ともに内閣から出て行かないように腐心していたのである（Lone[1991], p. 153. 1908年12月6日付、桂太郎宛伊藤博文書簡、桂[1951]、18-38）。

韓国の対日融和派も民衆の怒りを買っていた。一進会はその代表であった。とくに、一進会の指導者である宋への民衆の反感は強かった。当時の軍事参事官であった長谷川好道（よしみち）は、1908年1月27日付、陸軍大臣・寺内正毅宛書簡で、そのことを危惧していた（Lone, *ibid.* 寺内[1964]、38-30）。

1908年、追い詰められた伊藤は、武力行使に踏み切ってしまった。一進会との絶縁を決意したのである（黒龍会[1966]、第1巻、369～78ページ）。義兵鎮圧のために、伊藤は、本国に歩兵2個師団の増派を要請した。そして、義兵鎮圧後も軍隊を韓国から撤退させなかったのである（桂宛1908年12月6日伊藤書簡、桂[1951]、18-38）。

これまでの融和派から武断強硬路線に転換したことから、韓国の穏健派は、伊藤に裏切られたという感情を持つようになった。かつては伊藤の宣伝紙であったはずの『京城日報』⁽⁶⁾ですら、激しく伊藤を攻撃するようになって、1908年に何度も発禁処分を統監府から受けている（Lone[1991], p. 154）。

他方、融和姿勢を示していた時の伊藤への対韓強硬派の日本人は、統監府非公式顧問の内田良平、韓国金融副大臣の木内重4郎、右翼の杉山茂丸（しげまる）の面々であった⁽⁷⁾。

併合は、山県有朋ら陸軍系人脈が推し進めたものであるというのが菅浩二の見方である。

おわりに

いずれにせよ、日本人は、文化を伝えてくれた師たちを輩出してきた地、私たちの父祖の地の人々の心をついにつかめなかった。日本の権力者を批判することはたやすい。しかし、彼らを権力の座に押し上げたのは日本の庶民である。韓国併合100周年。同じことを

私たち日本人は繰り返している。

専門家だけでなく、素人も、自己の生活感覚に基づいて時代に異議申し立てをしなければならない時がある。いま、自分たちが冒してしまった行動に対する自省を言葉にしなければ、私たち日本人はかなりの長期に亘って、歴史の闇に押し込められることになるだろう。時代は、私たち日本人に対して苛酷な試練を与えている。こんな大事な時に、「坂の上の雲」！ 哀しい空気である。

注

* 査読者に感謝する。

(1) 朝鮮(Chosun)と韓国(Hanguk)との呼称について記す。李氏(I-si)朝鮮は、1392年、高麗(Goryeo)の武将、李成桂(Yi Seong Gye)太祖(Taejo)が恭讓(Gongyang)王を廃して、自ら高麗王に即いたことで成立した。李成桂は、翌1393年に中国の明(Ming)から朝鮮という名称を付与され(権知朝鮮国事)、国号をそれまでの高麗から朝鮮に改めた。1401年、太宗(Taejong)が明から朝鮮国王として冊封を受けた。そして、日清戦争終結後、日本と清(Qing)国との間での下関条約によって、朝鮮に対する清王朝の冊封体制が廃止され、朝鮮は1897年に国号を大韓帝国(韓国)に改められた。朝鮮国王も韓国皇帝に改称された。しかし、1910年の「韓国併合に関する条約」によって、韓国は日本に併合させられてしまった。この時の韓国は、いまの朝鮮人民民主主義共和国を含む半島全体の呼称だった。従って、併合は朝鮮・韓国併合ではなく韓国併合が正しい。ちなみに、日韓併合という用語は通称である。

(2) ハングルへの翻訳に携わったのは、スコットランド出身で、満州に赴任していたジョン・ロス(John Ross)であった(Grayson[1984])。

(3) 韓国併合前までの韓国におけるミッション・スクールについては、Paik[1919]がある。韓国でキリスト教が急速に普及した理由についての論争史については、Grayson[1985]に詳しい。

(4) 一進会は、1904年から1910年まで韓国で活動していた当時最大の政治結社。宮廷での権力闘争に幻滅し、外国勢力の力を借りてでも韓国の近代化を実現させようとする「開化派」の人々が設立した団体。日清・日露戦争に勝利した日本に接近し、日本政府から特別の庇護を受けた。日本と韓国の対等な連邦である韓日合邦(日韓併合とは異なる)を唱えた。韓国併合後、統監府から金銭取引を行った後、解散した(<http://d.hatena.ne.jp/keyword/%88%EA%90i%89%E7>)。

一進会の創始者、宋秉峻(1857~1925年)は、1873年から司憲府(Sahonbu)に務めた後、1884年、密命を受けて金玉均暗殺目的で日本に渡ったが、逆に説得されて金の同志になった。日露戦争時に、日本軍の通訳として親日に転向し、一進会を組織した。1907年のハグ密使事件の際には、高宗皇帝讓位運動を展開、高宗を退位に追い込んだ。同年、李完用内閣が成立すると、農商工部大臣・内相を勤めながら、「韓日合邦を要求する声明書」を曾禰荒助(そね・あらすけ)統監、李完用首相に提出した。併合後は、日本政府から朝鮮貴族として子爵に列せられ、朝鮮総督府中樞院顧問になり、後に伯爵となった。没後に正三位勲一等を追贈された(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%8B%E7%A7%89%E7%95%AF>)。

(5) 尹致昊(1865~1945年)は、李氏朝鮮末期の政治家。韓国併合後に男爵(朝鮮貴族)・貴族院議員。

1881年、朝鮮初の日本留学生（慶應義塾に留学）。帰国後、甲申政変に開化派として参加するが、開化派が敗北すると上海に逃れた後に米国に留学。上海滞在時にメソジストの洗礼を受けたが、米国留学時に苛酷な人種差別を受けたと言われている。帰国後、1896年に独立協会（Tongnip Hyeophoe）を結成。『独立新聞』（Tongnip Sinmun）を創刊し、朝鮮人による自力の近代化を説いた。やがて政権に迎えられ、第1次日韓協約締結時には外部大臣署理を務めた。韓国併合後、1911年に105人事件の首謀者として起訴され、男爵位を剥奪されるが、1915年に親日派に転向して釈放される。3・1独立運動が勃発した際にも「もし弱者が強者に対して無鉄砲に食って掛かったら強者の怒りを買って結局弱者自体に累が及ぶ」と否定的なコメントを残している。その一方で熱心なクリスチャンだったため、朝鮮キリスト教界の最高元老としても影響力を保持していた。また、彼の説いた「実力養成論」は後の独立運動家にも多大な影響を残し、一方で民族資本家や民族教育機関を育てる契機にもなった。1945年の日本の敗戦によって、それまでの親日的姿勢・行為を糾弾されたために自殺した（梁[1996]、参照）。

(6) 『京城日報』は、1905年の日露講話のポーツマス条約によって、日本の支配下に置かれた韓国で、京城（Gyeong-seong）に設置された朝鮮統監府の機関紙として創刊された新聞である。初代統監に就任した伊藤博文は、韓国統治に必要な有力新聞が必要であるとして、旧日本公使館機関紙『漢城新報』（1895年創刊）と『大同新報』（1904年創刊）を買収統合、統監府の機関紙として『京城日報』を1906年9月1日に創刊した。初代社長は大阪朝日新聞出身の伊東祐侃（ゆうかん）。1910年の韓国併合により、統監府は総督府に改組され、朝鮮統治における『京城日報』の役割を拡大させるべく、『國民新聞』社長の徳富蘇峰（猪1郎）を監督として迎えている。日本の敗戦により、1945年10月31日をもって日本人の手を離れて韓国人が事業を引き継いだ。同年、12月11日付を最後に廃刊となった（http://newspark.jp/newspark/data/pdf_siryou/c_34.pdf）。親日的指向の強い論調を張っていて、社長の任命や運営に関しても、総督府が主導権を握っていた。『朝鮮日報』や『東亜日報』など民間紙と比較しても、規模や影響力は大きかった（李[2006]）。

(7) 内田良平（1874～1937年）。福岡県出身。頭山満（とうやま・みつる）の門下生であった叔父の平岡浩太郎によって創設された「玄洋社」に入り、1894年に「東学党の乱」が発生するや、玄洋社の青年行動隊として韓国に渡り、これに参加した。フィリピン独立運動、中国革命の支援運動などにも参加。1901年1月、「黒龍会」を設立し、1931年には「大日本生産党」を結成し、総裁となった。黒龍会は、玄洋社と並ぶ右翼運動の思想的源流となった（<http://d.hatena.ne.jp/keyword/%C6%E2%C5%C4%CE%C9%CA%BF>）。韓国の農業近代化に打ち込むべきであると、内田は、伊藤統監と一進会を説得したらしい（Lone[1988], pp. 117-20）。

木内重四郎（1866～1925年）。千葉県出身。法制局参事官試補、貴族院、内務省、農商務省商工局長を歴任後、統監府農商工部長官になる。総督府を依頼免官後、貴族院議員となる。1916年京都府知事となるが、汚職の嫌疑、いわゆる「豚箱事件」で収監されるが無罪となる（<http://kotobank.jp/word/%E6%9C%A8%E5%86%85%E9%87%8D%E5%9B%9B%E9%83%8E>）。

杉山茂丸（1864～1935年）。福岡県生まれ、夢野久作（ゆめの・きゅうさく、本名・杉山直樹）の父。自由民権運動で頭山満と出会い玄洋社結成を助ける。日露戦争中にレーニンの帰国を計画し成功させるな

ど、明治維新以後の内外の大事件や運動の多くに関係していた。公職に就くことなく、あくまで黒幕として政財界で活躍した (<http://kotobank.jp/word/%E6%9D%89%E5%B1%B1%E8%8C%82%E4%B8%B8>)。

引用文献

李鍊[2006]、「朝鮮総督府の機関紙『京城日報』の創刊背景とその役割について」、『メディア史研究』21号、12月。

小笠原省三編[1953]、『海外神社史・上巻』海外神社史編纂会。

小川圭治・池明観編[1984]、『日韓キリスト教関係史資料、1876～1922』新教出版社。

桂太郎[1951]、『桂太郎関係文書』、国立国会図書館所蔵。

姜渭祚、沢正彦訳[1976]、『日本統治下朝鮮の宗教と政治』聖文社。

姜在彦[1982]、『朝鮮近代史研究』（第2版）日本評論社。初版は1970年。

金正明編[1964]、『日韓外交資料集成』（全10巻）巖南堂書店。

国立公文書館[1936]、『公文類聚』、第60編、第58巻、社寺門・3。

黒龍会[1966]、『日韓合邦秘史』（全2巻）原書房、初版は1930年。

佐伯有義[1905]、『全国神職会会報』、第69号。

菅浩二[2004]、『日本統治下の海外神社—朝鮮神宮・台湾神社と祭神』弘文堂。

田代和生[2002]、『倭館—鎖国時代の日本人町』文春新書。

朝鮮総督府[1921]、『朝鮮の統治と基督教』。復刻、青柳 綱太郎・朝鮮総督府『韓国植民策、韓国植民案内・朝鮮の統治と基督教（韓国併合史研究資料）』龍溪書舎、1995年。

高井弘之[2009]、『検証「坂の上の雲」えひめ教科書裁判を支える会。

寺内正毅[1964]、『寺内正毅文書』、国立国会図書館所蔵。

徳富蘇峰編「1929」、『素空山縣公伝』山縣公爵伝記編纂会。

中塚明[2009]、『司馬遼太郎の歴史観—その「朝鮮観」と「明治栄光論」を問う』高文社。

ネルー、ジャワーハルラル、大山聡訳[1966]、『父が子に語る世界歴史、第4巻「激動の19世紀」みすず書房。

藤村道生[1973]、『日清戦争』岩波新書。

陸奥宗光[1983]、中塚明校注『新訂・蹇蹇録』岩波文庫。

村井章介[1993]、『中世倭人伝』岩波新書。

梁賢恵[1996]、『尹致昊と金教臣・その親日と抗日の論理—近代朝鮮における民族的アイデンティティと基督教』新教出版社。

吉岡吉典[2009]、『「韓国併合」100年と日本』新日本出版社。

龍頭神社社務所[1936]、『龍頭神社史料』、国立公文書館[1936]、所蔵。

Chung, Chong Wha & J. E. Hoare[1984], *Korean-British Relations: Yesterday, and Tomorrow*,
Center for International Studies of Ch'ongju University.

Clark, Allen D.[1971], *A History of the Church in Korea*, Christian Literature Society of Korea.

Grayson, James H.[1984], "The Manchurian Connection: The Life and Work of The Rev. Dr.
John Ross," in Chun & Hoare[1984].

Grayson, James H.[1985], *Early Buddhism and Christianity in Korea: A Study in the
Implantation of Religion*, E. J. Brill.

Grayson, James H.[1993], "Christianity and State Shinto in Colonial Korea: a Clash of
Nationalisms and Religious Beliefs," *Diskus*, Vol. 1, No. 2.

Keene, Donald [2002], *Emperor of Japan: Meiji and His World, 1852-1912*, Columbia
University Press. 邦訳、キーン、ドナルド、角地幸男訳『明治天皇』（全4冊）新潮文庫、
2007年。

Lone, Stewart[1991], "The Japanese Annexation of Korea 1910: The Failure of East Asian
Co-Prosperity," *Modern Asian Studies*, Vol. 25, No. 1, February.

Paik, Lak Geon, George,[1929] *The History of Protestant Missions in Korea: 1832 - 1910*,
Yonsei University Press, revised edition, 1971.